

〔紀伊國名所圖會三編二〕地蔵寺

西福寺に隣る、寺内に古き石燈籠の柱基を納む、中略其銘真中に

光明真言講中建立と書し、左右に大道元年七月吉日と書す、長は

一尺八寸ばかりあり、廻り一尺七寸ばかりあり、

傳へいふ、大道は大同と同音の字を用ひたるにて、此石は弘法大師漢土より歸朝のとき建し所なり云々、今按るに、隣寺の石燈籠の正平の銘と較ぶるに、字體石質稍新しければ、決して千有餘年の物にあらず、此頃友人の筆記を閲するに、異年號を載たる中に、越後國蒲原郡佐所村の吏民某の先祖石井彦七に賜ひし文書に、大道二年八月二日源吉次名草とある由を載す、此碑即其前年なれば大同にあらざる事益明なり、彼二年の文書は元弘建武の後の物といへり、是によりて按るに、兩朝御和睦の後嘉吉年間、南朝の遺民義有王を擁して兵を本國に移し、私に建る所にして、彼天靖などいふ年號の類ならんか、猶後なるか、明證なしといへども、南朝に奉仕せし人の子孫等、前朝の微運を憤りて、當時の年號を用ふる事を快とせずして、私に建たる號なるべし、今偶北越南紀に此年號を記せる物の存する事奇といふべし。

〔古今金工便覽下〕信家

增田明珍、出雲守紀宗介十七代、左近將監、永正享祿、大永、弘治、天文、土州、白井、住、又甲州府中住、大隅守覺意、入道、武田晴信、侯ノ諏訪法性ノ兜ヲ作ル、コノ

安家ト云、後ニ晴信ノ一字ヲ賜リテ信家ト銘ス、〇中略

寶壽二年甲午正月日

明珍信家 花押

○按ズルニ、甲午ハ天文三年ニ當レリ、

〔逸年號考〕寶壽二年 鍍金寶塔銘

寶塔銘に、奉納大乘妙典六十六部、雲州之住周慶、寶壽二年今月今日、の寶塔、天明二年壬寅三月十一日、信濃國佐久郡上畑村にて掘出す所なるが、同時に、天文廿年今月今日、信州住人順慶と銘ある經筒、とあるを以て考ふるに、この天文廿年を、出雲國にて寶壽二年と云る事ありしにもやあらん、

〔續雨夜友五〕年號改元以前紛敷年號市中賣步行候聞書